特集（緒言）

特集「子どもの全人的発達を見据えた日本語教育－『ライフコース』という視座からの取り組み－」の発行にあたって

キーワード
子どもの日本語教育，全人的発達，ライフコース，当事者

原瑞穂・池上摩希子・和泉元千春

子どもたちに対する日本語教育を考える際，子どもは成人と異なり，成長発達の過程にあるという点が肝要となる。子どもたちに対し，日本語の言語的特徴や型に対する知識伝授や練習だけを続けていても，学校生活や教科等の学習活動に日本語で参加できるようになるのは容易ではない。さらに，日本語で地域活動に参加し，その過程で自己を成長させ，自律した成人として社会に参画できるようになることを期待するのも難しい。なぜなら，子どもたちの発達には，母語や日本語などの言語面，認知面や情緒面，さらには社会化のプロセスにおける発達も含まれているためである。さらに，子どもたちは，他者とのやりとりや読み物など自己を取り巻く環境とのかかわりを通して複数の文化や言語に触れ，それらを取り込み，自らの文化や言語，アイデンティティ，学力などを育みながら大人へと成長していく。故に，子どもたちに対する日本語教育は，子どもたちが成長発達過程において，どのような経験をし，何を身につけ，どのような役割を持ち，どのように人生を歩んでいくのかという「ライフコース」の視座を持ち，複層的に捉えて検討する必要があると考える。

以上の問題意識から，第 6 号では，「子どもの全人的発達を見据えた日本語教育－「ライフコース」という視座からの取り組み－」をテーマに特集を組んだ。

第一部は，移住者とその子自身が綴ったライフストーリーである。結婚後に日本へ移住した母（ケース 1）と日本で生まれ育った娘（ケース 2）が，各々に自らの半生をふり返り，自らを家族や周囲の人びとに対してどのように位置づけ，意味づけて人生を歩んできたのか，これからの人生を歩もうとしているのかについて，それぞれの立場で語っている。双方の論考から，チュニジアにルーツを持ち，日本で生きる中で浮かび上がる母の孤独，居場所と日本語の関係，母の日本語の運用力と娘のアラビア語の運用力の差を埋める家庭内の意思疎通の図り方，娘の学校生活での出来事に対する各々の思い，日本社会とイスラム教社会の価値観の違いに対峙する母と娘の姿を窺い知ることができる。さらには，日本で生きる母としてあるいは娘としての自らの役割に対する考えも語られている。同一のエピソードが母親と娘の各々の視点から語られていることから，子の成長発達過程における重要な局面

と現実の家庭の中の親子のあり様をより詳細に捉えることができる。なお，当初，家族内でライフが示されることで母親と娘の関係性に影響があるのではないかと危惧した。しかしながら，今回のケースではその意義を受け止めたうえで執筆が進められ，稿としてまとまった後には双方からポジティブな反応が得られている。

第二部は，問題意識の共有の難しさや，人と人や組織と組織とのつながりにくさという特徴を有する散在地域で移住者に寄り添い，支援活動に携わってきた支援者二名が綴ったライフストーリーである。ケース 3 では，支援者が，母親の妊娠時から乳児期，幼児期，児童期，青年期にかけて，親と子が直面する様々な困難や戸惑いに接し，自らを「つなぎ人」として位置づけ，自らが他者や他機関とつながることや，人と人をつなげることによって風穴を開けてきたプロセスが綴られている。当人達のみではなく，周囲の人びとや制度や仕組みとのかかわりの中で課題を捉え，双方へアプローチする姿が描き出されている。ケース 4 では，日本語支援中心の取り組みから始まった NPO 法人が，外国につながる子どもたちの「ライフコース」の支援も重視した取り組みを行うに至るまでの経緯や，現在の取り組みの内容について支援者の視点で紹介されている。特に，支援者が青年期の中高生や若い世代の支援活動に携わる中で，当人達から寄せられる声から本当の思いを読み取り，社会との結節点を持つための企画を実施してきたこと，その経験から青年達が力を取り戻していく姿が描き出されている。

第一部
ケース 1　「移住者・母・イスラム教徒のライフストーリーー異文化社会での適応プロセスを描くー」
福村真紀子（茨城大学）・ソニア　スラマ（アラビア語・英語講師）
ケース 2　「日本で生まれた外国人・イスラム教徒・女性ー異文化の狭間でー」
ハビーバ　スラマ（専修大学　学部生）
第二部
ケース 3　「散在地域に暮らす外国につながる親と子に寄り添って」
佐藤睦子（公益社団法人上越国際交流協会）

ケース 4　「外国ルーツ青少年の声とライフコースー外国人散在地域で活動する市民団体の歩みからー」
青木由香（NPO 法人アレッセ高岡）

当事者が綴るこれら 4 編の論考が，子どもの日本語教育に携わる方々にとって，子どもたちの全人的な発達を見据えた日本語教育のあり方について考える契機となれば幸いである。

（原瑞穂；上越教育大学／池上摩希子；早稲田大学／和泉元千春；奈良教育大学）